

歴史學の現代性

西井克己

「私は忌憚なく斷言する。科學は真理自身のための真理以外にゴールを持つべきではない。それは真理の實際的應用から生ずる結果の善悪や、幸不幸に關はるべきでない。又如何なる理由からであれ、例へば愛國的・社會的乃至道德的理由からであれ、真理を少しでも曲けてはならない。真理を曲げるものは、精神の殿堂に於て席を占めることは許されない」とのガストン・バリの主張を論駁しつゝ、「舊時代の文化主義者や知性主義者は、ガストン・バリの如く真理を尊敬する。そしてその真理はそれが何よりも真理であることに價值を置きその實際的結果については關心を拂はない。彼等は社會や國家や人類や生活や正義を何等顧慮せずに真理を探究し真理を尊敬

する。……だが今日に於ては真理は常に實踐の中に存してゐるのである」と土肥原賢二氏は、本年六月號中央公論所載「新時代を戰ふ日本」なる論文に於て強調して居られる。

私も亦、科學の非時代性を疑ふ一人である。科學の爲の科學が存在する様に思へるのは、許容されたる科學が其時代に於て全くヘーゲルの所謂 *vernünftig* であり、從つて其時永遠不易と信ぜられたからに外ならない。

歴史學は謂ふ迄もなく科學の一部門であるが故に、當然各時代の社會からの超越は許されない。換言すれば、歴史學は、夫々の時代に於ける現代的なる社會の歴史的發展なる實踐に協力する事を要請せられ、協力する事に依て具體性を有ち、却つて又進歩するのである。とは謂へ、其は歴史學が科學性を有たないと謂ふ事にはならな

る。……だが今日に於ては真理は常に實踐の中に存してゐるのである」と土肥原賢二氏は、本年六月號中央公論所載「新時代を戰ふ日本」なる論文に於て強調して居られる。

いであらう。歴史學が、社會と協力する事の時代的制約を受けねばならないと謂ふ事は、歴史學の歪曲とは決して同一ではない。歴史が學として成立する爲には、實踐に依る夫々の時代の現代性を有つと共に、科學性をも有たねばならないのである。

斯る歴史學が有ち有たねばならない謂は、*lehrhaft*なものとして *wissenschaftlich* なものとの關係を觀る事は、殊に今日の吾々にとつて緊要事でないならぬであらう。然し乍ら、私が以下試んとする處のものは唯、一應夫々の時代の現代的制約とは自由なるかの如き歴史の科學性にも、何等かの現代性はないのであらうか、若しあらば、學として成立する爲には如何なる程度に現代性を帯びなければならぬかと謂ふ問題に就いてある。

二

謂ふ迄もなく歴史學は、アンリ・セーも「歴史の任務は正しく展開せられたる諸事件諸變化竝に諸變形への解釋に努める事に存する。歴史は何よりも先づ *explicative* で

ある事に依て科學の名に値する。(H. Sée: Science et philosophie de l'histoire, Paris, 1933, p. 255)と謂へる如く、解釋の學である。解釋の爲には認識が不可分離の關係にあり、認識された處のものが、史料の名を以て稱ばれてゐるのも周知の事實であらう。

「歴史學の認識に汲みとられる Material を Quelle と稱す」(Bernheim: Einleitung in die Geschichtswissen., J. v. Schaff, Sammlung Göschen, Berlin, 1926, S. 99)」ジュン・ハイムは、素材と史料を判然區別してゐる。今の私には彼が其著「歴史とは何ぞや」第三章第二節 Quellenkunde (S. 99) の項にあげたる數多史料たる可きものゝ種類如何に立入る必要はない。唯此處に於て我々は、認識と解釋が歴史學成立の第一重要々件である事を注目しなければならぬであらう。

私は「事實が思惟される限りに於て歴史的事實であり、思考の外には何も存しないが故に、何が歴史的事實であり、又何が歴史的事實でないかの間は、全然意味を有たない。非歴史的事實とは思惟されず、従つて存在せざる事實を意味する」(Croce: Zur Theorie und Geschichte der Historiographie, übersetzt v. Pizzo, Tübingen)

can. 1915, S. 96)』とのクロチエの歴史事實に對する見解には、全面的に心服する事は出来ない。思惟されたるものは Quelle であり、思惟されざるものは Material であつても、而も其等は先人が遣せる歴史的事實である事に相違はないからである。吾々は、歴史的事實と歴史學的事實を混合してはならない。とは謂へ私は、同時に Gedanken の意義を特に強調する彼の歴史學への深き洞察に敬服せざるを得ない。思惟認識解釋以前の事實は歴史的事實であつても、歴史學的事實ではなく、歴史學は成立しないからである。

處で、思惟し認識し解釋する者は現代人である。其は現在生きてゐる人の謂ひではない。凡ゆる時代に夫々生を享受した現代人の意である。而も彼等の思惟認識解釋は、其時代、其階層、各々の個性に依て餘りにも多様であつたのであり、又餘りにも多彩であるのである。史學史を一瞥するだに、吾々は歴史觀の洵に數多くして一ならざるに唯驚嘆する許りである。斯くて歴史學は、夫々の時代に於ける現代人個々の思惟認識解釋に依て成立す

るが故に、其は唯其人達にのみ許容さる可き主觀的なものに過ぎないのであらうか。歴史學は解釋の學なるが故に、主觀的たる事が却つて科學的であり、従つて客觀性は存しないのであらうか。

思惟認識解釋が果して全く主觀的であるのか——私には右の解答の鍵が寧ろ此處に在る様に思へてならない。

先に私が、アンリ・セエやベルンハイム乃至クロチエ等の言葉を引用したのは、歴史學が解釋の學である事を言はんが爲に外ならなかつた。然し私は同時に、クロチエの歴史事實に對する見解に若干の疑問を抱いたのである。

ベルンハイムの謂ふ史料は、既に歴史家の認識の對象となつた處のものであり、確に其處には嚴密な意味の客觀性は存しないであらう。然し乍ら、史料は素材を前提としなければ成立し得ない、歴史學的事實は常に歴史的事實に制約されねばならないのである。而も素材・歴史的事實は、其人の思惟認識解釋の如何に拘らず存在するのである。斯る歴史的事實には、素より數多き種類の存する事謂ふ迄もないが、先人が遣せる歴史の所産は飽迄

儼然として存在する、謂はゞ自然科學に謂ふ物體の如き客觀的實在である。

歴史學は、斯る客觀的實在を通じて可能なるが故に、常に客觀性を有つ筈である。

以上私は、歴史學を成立せしめられる處のもの、側よりその客觀性科學性を觀て來たのであり、歴史學を成立せしめる處の者、即ち吾々乃至夫々の時代の現代人の思惟認識解釋そのものに就いては餘り觸れる處はなかつた。歴史學成立は思惟認識解釋に依つて可能であり、而も其は時代的な個人的な主觀性を有つ事によつて、*wilkrürlich* に客觀性を抹殺してもいゝと謂ふが如きは餘りに妄言であらう。私達には従つて唯、思惟認識解釋が主觀的なものであつても、其處にも亦學成立の根本條件たる客觀性が何等かの形に於て存しないであらうか、又若し在りとせば如何ある可き事に依てあるかの問題の究明があるのみである。

三

「人類が精神諸科學の對象として表れるのは、人間の諸形態が體驗され、生の外化に於て表現を得、此等の表現が理解される限りに於てである (Dilthey: *Der Aufbau der Geisteswissenschaften, Gesamtheite*)」とのディルタイの言葉を藉りて吾々は、歴史が精神科學の對象として表れるのは、歴史の諸形態が體驗され、歴史的表现が理解される限りに於てであると言へないであらうか。而も歴史に對する思惟認識解釋は、歴史への體驗と理解と謂ふ、グルンドあつてのみ可能なのである。

歴史に對する思惟認識解釋の客觀性の有無乃至其限界の問題は、歴史的體驗と理解に果して客觀性ありや否や、若しあらば如何なる限度に於てあるかの問題となるであらう。吾々は斯くて、歴史的體驗と理解とは如何なるものであらうかに眼を注ぐ可きであらう。

處で吾々 (嚴密には夫々の時代の吾々とすべきであるが、煩雜の爲以下多く省略) の歴史的體驗と理解は、大體二つに分けて考へ得られないであらうか。

過去の歴史を體驗理解する事はその一つである。其時、

過去の歴史を體驗理解するとは如何なる事なのであらうか。過去の歴史を體驗し理解し得る手掛りとなる處のものは謂ふ迄もなく、過去の歴史的事實なのである。其は飽迄も客觀的なものであり、體驗し理解せしめるものを内在せしめつゝあるけれども、然し其を體驗し理解し得る處のものは、唯吾々のみなのである。客體は主體を通じて體驗され理解されるのである。而も現代の吾々は、例へば古代の歴史的事實を通してのみ、果して何等の夾雜物もなき洵に古代史的な眞の姿を、有りしが儘に再現し得るであらうか。ブリックマンの説く様に *mit unse-
ren Augen* に依つてなく、*mit seinen Augen* に依つてのみ觀得るとは、到底私には考へ難いのである。吾々が過去の歴史的體驗と理解をなし得るとは、唯近似性に於てとあつて同一性に於てはならないのである。吾々は寧ろ此處に於て、客觀性と共に吾々の歴史的體驗と理解が飽迄主動的なものである事を知る可きであらう。

其際の歴史的體驗と理解を、今一つの歴史的體驗と理解として私は、現代史的體驗と理解と稱し度いと思ふ。

吾々の前に存在する歴史的諸事實は、洵に茫然たらざるを得ない程限りなく存する。歴史の素材を其本質上より區別しても、或は政治的なもの、狹義の文化的なもの、或は經濟的なもの乃至社會的なもの等々の如くである。其際、例へば政治事象のみの一應の解明は、恐らく或一定の技術さへあれば達成せられ得るかも知れない。政治的素材の涉獵は、或程度其を果して呉れるであらうから。然し唯それのみでは、唯徒らに政治的事象の羅列があるのみであつて、歴史學的政治史は成立しないであらう。政治事象の認知は決して學としての政治史と同一ではないのである。政治史が、歴史學の一分野であり得る爲には、常に他の凡ゆる歴史事實との相互關聯に於て考察されねばならない。然し其は、政治的なもの、他のものへの優越性を否定する事にはならない。政治史觀と謂はれるものは、政治史の爲の政治史研究を行はんとする者の歴史觀とは全く似而非なるものである。歴史は常に一つの不可分離的複合體であるが故に、一の他よりの全き捨象はあり得ないのである。吾々が史學史を繙き、或は

政治史觀・文化史觀・唯物史觀等々と稱せらるゝ處のものを知る時、其は單に政治的事象・文化的事象・社會經濟事象の究明にのみ終始してゐない事を認め得るであらう。夫々の強調こそあれ、其は常に他のものへの絶えざる關心を伴つてゐるのである。學としての歴史は、常に斯る綜合的見地に立つ事に依て成立するのである。

處で斯る歴史觀は、果して一體何處より由來するのであらうか。

歴史的事實は吾々に、思惟認識解釋を要請するけれども、決して其は解決を與へて呉れない。歴史の素材たる所以である。斯くて其要望に應へ得るのは唯吾々だけなのである。而も其鍵は、一にかゝつて吾々の歴史的體驗と理解に存するのである。そして亦、其歴史的體驗と理解も、過去の歴史的事實が容易に與へやうとして呉れるもの、少くとも主動性を持つものではなかつたのである。歴史的體驗と理解は、従つて唯、吾々の現代の歴史への體驗と理解が最も根源的なものである。歴史觀の相違は、斯る吾々の現代史への體驗と理解如何に依て生れるので

あらう。

然らば、現代史への體驗と理解は如何なる點に成立し、如何ある事に依て何等かの客觀性を有ち、又却つて過去の歴史的體驗と理解を深め歴史學をしてより學的たらしめ得るのであらうか。

歴史を過去のなるものとする時、現代の歴史的體驗と理解は不可能に思へるかも知れない。然し、歴史を單に時間的に過去なるものとする見解は、最早認められないであらう。「現在は現在であると共に、過去現在未來の同時性である(高坂正顯氏著『歴史哲學と政治哲學』教養文庫3五八頁)」との高坂正顯氏の説は味ふ可きである。今日吾々が眼前にし、又相共に動き創造しつゝあるのは實に現代の歴史なのである。

現代の歴史は斯く認め得られるにしても、私達は、今日の吾々は餘りに知り得ざる事が多過ぎる、現代史への體驗と理解は甚しく困難であるとの聲を、往々にして聞くのである。然し其は果して、現代史的體驗と理解の不可能を意味するのであらうか。斯る困難と雖も、唯徒ら

に數多く無關聯なる歴史的材料を知り乍ら、歴史の體驗と理解の貧困の故に茫然たらざるを得ない苦惱とは、自ら異なる處のものであり、又吾々が餘りに知り得ざる事多き事自體が一つの事實であり、其を知る事に依て歴史的體驗と理解を更に深める事になるのではなからうか。

現代史的體驗と理解は、斯くて成立する様に思はれる。然し其は、如何ある爲に客觀性を有ち得るのであらうか。

過去の歴史的事實は、唯其のみでは何等歴史學成立の鍵を與へて呉れない。歴史學は吾々の思惟認識解釋に依りて成立し、其は現代史的體驗と理解に基いて可能であるに過ぎないのであつたが、私は、吾々が現に協働し發展せしめつゝある今日の歴史程に、身近に觸れ其眞偽を疑ひ得ない、最も生きた客觀的歴史的现象を見出す事が出来ない。過去の歴史が吾々の前に其姿を再現するとしても、其は唯今日殘存する歴史的事實を通して、あるに比して、今日吾々が體驗し理解し得可き現代史は、如何許り豊富な歴史内容を有ち又客觀的なものであらうか。過去の歴史は、政治的なもの、文化的なもの、社會經濟的

なもの等々の歴史の素材を提供しても、唯其のみでは、此等が同じ力乃至一は他を究局に支配する關係の何れであれ、密接不可分離的關係にあつたであらう其時代の歴史の姿を示すものではない。然るに現代の歴史は、此等のものゝ綜合された複合體、全體の中に動いてゐるのである。歴史を把握するとは、此等のものゝ單なる集合に非ずして綜合された全體に於て把握する事である筈である。過去の歴史的事實は、唯素材として夫々孤立的に存すると謂ふのみにて斯る全體的把握の鍵を與へて呉れないが故に、吾々は唯現代の歴史のみ學びるのである。現代史は、吾々にとつて最も客觀的であり、複合的全體的歴史の姿を現實に示す唯一のものであるが故に、其への體驗と理解は、歴史一般への體驗と理解の基本となり、又客觀的なのである。其際、吾々の體驗が愈々豊富に理解が益々深くある事に依て、歴史は層一層眞實に近く思惟認識解釋せられ、更に科學性を有つ事は謂ふ迄もなからう。

斯くて歴史は、二重の意味に於て客觀性を有ち、歴史

學として成立する。歴史的事實に常に制約されねばならないと謂ふ事その一つであり、現代史への體驗と理解がさうであると謂ふ事その二つである。

「最後に、此事からして重要な結論が、自己のものでない過去の諸文化の、又吾々自身の文化圏の過去の諸範圍さへもの評價に對して生ずる。此等のものは、二重の評價の下に立つてゐる。先づ第一には、出来るだけ忠實嚴密に、事實に則し且自己を無にして傳承物を引出す必要のある、其自身事實的な、存在せし意味及び内容に則して測定する作用の、内在的な標準の下に立つてゐる。然し次には、其等の標準から同化乃至對立を通して近づかれ、又實現される處の、吾々自身の隣間的に形成せられつゝ、ある文化理想への關係の下に立つてゐる。第一の處に於ては此上もなき客觀性が、第二の點に於ては、同化し態度を定める、改變し融合せしめる主觀性が支配してゐる (Troeltsch: Der Historismus und seine Probleme, Gesammelte Schriften, Bd. 3, Tübingen, 1922, S. 177)」とのトレルチの見解は、傾聴すべきであらう。然し私は、彼が歴史解釋に、其時代の生活理想と現代の生活理想と

の綜合、即ち所謂 Gegenwartssynthese, Kultursynthese を強調し以て主觀的とする後者にも客觀性を認め度いのである。

私が、歴史學の現代性に就いて知り得たのは、歴史學は現代的性格を有ち、却つて其事に依て、より一層客觀的な學たり謂ると謂ふ事であつた。

四

然し乍ら私は、結論を急ぐの餘り、歴史學の現代性に就いて尙言及すべき若干の問題に觸れなかつた様である。

「各時代は直接神に通ずる。各時代の價値は…正に時代の獨自的存在、即ち時代の特有なる自己性に存する。…自らに先行する時代は存しないが故に、Gottheitは歴史的人間性の凡てをGesamtheitの中に見渡し、到る處に同じ價値を見出す (v. Ranke: Über die Epochen der neu-)」と謂ふランケ史觀は、各時代が夫々特異なる價値を有し、夫々完結した意味内容を有つ事を主張するが故に、或は

現代史への體驗と理解が過去の歴史把握の基礎とはならないとし、卑見を拒否する事になるかも知れない。確かに、夫々の時代は夫々に特有なる價值を有つが故に正に時代であるのであるが、然し斯る時代に意味内容を見出し得るのは、唯吾々のみであつた筈である。而も其吾々は、

過去現在の差こそあれ、相共に歴史其物を創造し創造しつゝあるのであり、又例へば、中世の政治と近世の政治とは全く意味内容を異にするとは謂へ、其と夫々の時代の文化的なもの、社會經濟的なもの等々への關聯の仕方、即ち歴史的構造歴史的全體性に於て、殆んど相違する處ないと思はれるが故に、假令現代史的體驗と理解に依て、過去の歴史への思惟認識解釋が凡て盡し得らるゝにはないにしても、最も多き近似性を有つて可能なのである。

吾々は又、古きを温ねて新しきを知るとの人々に膾炙せる言葉に耳を藉す可きであらう。過去の歴史への把握が完ければ完かるだけ、其は却つて吾々に、吾々の歴史的體驗と理解を容易ならしめて呉れるからである。然し、過去の歴史を把握する者は、飽迄吾々でなければならな

いのである。是は一見循環論の如くではあるけれども、後者が常に主動性を有ち乍ら保ちつゝある兩者間の相互關係は、辨證法的見地に立つ事に依て自ら説明せらるゝであらう。

それにしても、卑見を根底より覆へすかの如きは、吾々が現實に體驗し又理解し得る現代史は、確かに客觀的なものに相違ないが、其を體驗し理解するのは飽迄、吾々自らであり、従つて其處には當然主觀が介在し、夫々各人の體驗と理解に基いて成立した何れの歴史が、客觀的なるかは斷じ難いとの説である。而も私自身、現代史的體驗と理解が必然的に伴ふ主觀性を無視抹殺して迄、客觀性のみを主張しやうとする者ではないのである。是は一見奇異の如く感ぜられるかも知れない。然し私は唯、歴史學成立の根底たる可き歴史的體驗と理解は、一に現代史への其のみに依て爲し得られ、又其が吾々の否定し難く且身を以て没入し得る歴史なるが故に、他の何物より優れて客觀的であり得るのであらうと言ふに留つたのである。然し其は同時に、吾々の歴史的體驗と理解が、

現代史への其であれば凡てあると謂ふ事にはならないであらう。體驗の豊富と理解の深さ如何に依て、自らより客觀的であるか、より科學的であるかゞ決定されるのである。

歴史學成立の基本條件たる現代史體驗と理解が、その客觀性に限度を有つが故に、歴史學自體決して絶對的客觀を有たない。然し是は、他の學に於ても同様言ひ得る事であつて、其爲歴史が學として成立し難いと謂ふ事にはならないし、歴史學が現代性を有つ事に依て科學的生命を喪ふとは結論され得ないであらう。學は常に、相對的客觀性を帯びる事に依て學であり、其故に學其物の發展が可能なのである。

五

歴史觀の多様にして一ならず、而も其殆んど何れもが甚しき動搖と混亂の中に置かれてゐるかの如き現狀に直面して、歴史は如何ある事に依て學たり得るかの問題に逢着、自ら何等かの解決を得んと半歩を運んだ私の貧し

き省察の努力は、今にして漸く、歴史學の現代性の問題に觸れた許りである。而も其處に、或客觀的なものを見出し得たのみであつて、文字通り絶對的に客觀的なものは探究し得なかつた。或は其は、斯る歴史哲學の問題が、私の到底容喙し得ない處のものであつた爲かも知れない。或は是が、歴史學其物が有つ一つの性格かも知れない。

然し私は唯、非才なる歴史學徒としても、是非一度は究明しなければならぬ問題に入つたゞけであり、私達の終局の課題は、素より吾々が現代史に依て得たる體驗と理解を以て、如何に過去の歴史を思惟認識解釋し、より正しき姿を把握し描き出し得るかの具體的問題にあるのである。

従つて、歴史學は、儼として歪曲し難き歴史的事實の制約を受ける事に依て、客觀性を有ち得る事は勿論、現代史への豊富なる體驗と深き理解に基いて、換言すれば、現代性を有する事に依つて、より客觀的であり、學的根據を有つと結論せんとした此小文は、問題の解決ではなく、問題の提起に終つたと言へるかも知れない。（完）